

発行

千葉県立中央博物館
房総の山のフィールド・ミュージアム

発行

〒260-8682
千葉市中央区青葉町955-2
TEL:043-265-3111

[http://www.chiba-muse.or.jp/
NATURAL/special/yama/](http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/yama/)

2017(平成29)年9月発行

しいむじな

2017・秋

58

特集

里山に生きる ホトケさま



房総の山のフィールド・ミュージアムとは

清和県民の森を中心とした房総の山を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」としてとらえる、千葉県立中央博物館が中心となっておこなっている新しい博物館活動です。観察会の開催、君津市立三島小学校の「教室博物館」開設に加え、地域の人々と協働で資料の収集や調査・研究等をおこなっています。

突然ですが、この魚の名前わかりますか？

普段魚を真正面からみることはほとんどないと思うので、わかる人は少ないと思います。

正解はホトケドジョウです。魚に興味がない人にとっては、名前を聞いたことのないかもしれません。今回は里山に生きるこの小さな魚について特集で紹介します。

(後藤 亮)



里山に生きるホトケさま



写真① 普通のドジョウに比べると太くて短い。体の側面に斑紋があるもの(上)、目立たないもの(下)がいます。



写真② ホトケドジョウが生息する細流

特集

ホトケドジョウは名前のとおりドジョウの仲間で、東北地方から近畿地方にかけて生息しています。ドジョウとは結構違います。まずヒゲの数。食用にされるドジョウはヒゲが十本ですが、ホトケドジョウは八本しかありません。次に体型です。皆さん御存知の通りドジョウは細長くニョロニョロとした体をしていますが、ホトケドジョウは比較的太くて短い体をしています(写真①)。愛嬌のある顔と体

型から観賞魚としても人気があります。ホトケドジョウの名前の由来ですが、一説では、その顔が仏様のようにやさしい顔つきをしているからだとも言われますが明らかではありません。ホトケドジョウには地方名がたくさんあり、千葉県では「しみずどじょう」や「だるまどじょう」と呼ぶ所があるそうです。だるまどじょうなどはずんぐりむっくりした体型から由来しているのでしょう。面白い(かわいそ

うな)地方名としては山形県の「馬糞鱒(うまのくそどじょう)」というのがあります。これは明治初期に書かれた「両羽博物図譜」にも登場し、「人其名を悪して、之を食はざるものとなすもの多し(その名前を嫌がり、これを食べないものとする人が多い)」と説明されています。食べられることはなかったのでホトケドジョウにとつては良かったのですが、食べられることは良かったのかもしれませんが、なんとも不名誉な名前です。地方名がたくさんあることから、この魚が昔から人々が慣れ親しんできた魚であることが窺えます。

②のような山から流れ出る細流や、湧水池、水田のまわり、河川の上流から中流域です。いわゆる里山にたくさん生息しているので昔から人々が慣れ親しんでいたのだと考えられます。毎年、小糸川でおこなう観察会(山の学校「川の生きもの」)でも必ず出会うことが出来ます。しかしながら、現在、河川改修や田んぼの休耕田化により、すみやすい環境が少なくなり、全国的にホトケドジョウの数は減少しています。そのため、環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧IB類で、千葉県では比較的生息数が多いものの要保護生物に指定されています。

それではホトケドジョウはどのようなところにすんでいるのでしょうか?それは写真

いつでもこの愛らしい顔をしたホトケさまが里山で生き続けることができるような環境を守っていかねばなりません。

コラム

房総丘陵の動植物(6)

シロウリガイ化石

房総丘陵は、深い海に堆積した地層からできています。地層に含まれる化石から、さまざまな深海の証拠を見いだせます。ここで紹介するシロウリガイ類は、まさに深海生物の代表といえる特殊な貝です。

シロウリガイ類は、その多くが殻長十センチメートルをこえる大型の二枚貝です。かつては貝殻や化石でしか知られておらず、その生態は長らく不明でしたが、一九七六年にガラパゴス諸島沖の水深約二千五百メートルの深海から発見され、一躍脚光を浴びました。水深が千メートルを超える深海では、太陽光はまったく届きません。そんな環境には、無機物からエネルギーを生成する化学合成細菌に依存した「化学合成生態系」が存在します。シロウリガイ類は、自ら餌を取らないかわりに、海底から湧き出す硫化水素を体内に取り込みます。その硫化水素から、エラに共生する細菌が有機物を合成し、それがシロウリガイ類の栄養として利用されるのです。現在までに、シロウリガイ類は、日本近海を含めた世界各地のプレート境界付近で、海底からメタンや硫化水素が湧き出す場所(熱水噴

出孔周辺や湧水域)に生息することが知られています。

ここで紹介する化石(写真①)は、鴨川市天津にある約八百万年前の地層から発見されました。殻は大型で前後に長く、殻の腹側は中央部で深く凹み、殻頂は前端に寄り、二枚の殻をつなぐ韌帯がとても長いといった特徴があります。これらのことから、ナギナタシロウリガイ属の仲間とわかりました。この化石は、左右の二枚の殻が合わさっているため、生息場所での化石になったと考えられます。また、オウナガイやキヌタレガイなどの化学合成生態系の一員と一緒に見つかったことから、地層が堆積した当時、メタンや硫化水素が湧き出す環境であったことを示しています。

房総半島には、シロウリガイ類化石を産出する場所が他にも知られ、その地層の年代は、約千八百万年前(南房総市荒川)、約三百五十万年前(南房総市白浜町)、約二百万年前(大多喜町栗又)など、さまざまな時代にわたっています。このことは、房総半島が、長い地質時代にわたって、深海だった証拠といえるのです。

(伊左治鎮司)



写真① 鴨川市天津から発見されたシロウリガイ類化石(*Adulomya?* sp.)
左右の殻が合わさっており、右殻の下に左殻の一部が見えます。

観察会報告

川の生きもの1,2,3

6月17日(42名参加)、7月15日(36名)、8月19日(9名)に清和県民の森近くの小糸川で、川の生きもの観察会をおこない、たくさんの親子が参加されました。子供たちはあみを片手に、大人たちも一緒に(実は子供以上に童心にかえて)夢中になってとっていました。表紙に登場した「ホトケドジョウ」もその一つです。

- 写真① 初夏の小糸川(6月17日)
- 写真② サワガニいっぱい!(6月17日)
- 写真③ 蛇(ヒバカリ)の子供だよ。さわってごらん(7月15日)
- 写真④ カジカガエルだ!(7月15日)
- 写真⑤ トンボうまく捕まえたでしょ!(8月19日)
- 写真⑥ 天然のプールだね(8月19日)

(岡崎浩子)



連載

小櫃川流域の生きもの

バン～おでこがきれいな紅色

「クルッ」と一声、バンの鋭い鳴き声が響きました。ここは市街地の湿地、ヨシやハスの葉が風でザワザワと音を立てています。

角を曲がるとバンの親子が舗装道を歩いていました。親の紅色のおでこが夏の陽で輝いています。3羽のヒナはくちばし以外真っ黒です。ヒナが懸命に親の後を追ひ、ヨシ原に駆け込み姿を隠しました。

少し待つとバンの親子がヨシやハスの間をかいぐり、舗装道に出てきました。そして、野菜くずを捨てたハス田で、えさを

採り始めました。

近所の方がこの湿地に散歩にきます。そのせいか、警戒心の強いバンの親子が人慣れし、道によく現れます。

青緑のヨシやハスの中で見るバンのおでこの紅色、黄青色の脚はとても美しく、バンの親子はこの湿地の夏の風物詩です。

さて、バンは小櫃川では非繁殖期の冬季には見かけますが、繁殖期の夏には見られません。下流域のバンの繁殖にこの湿地がとても大切だと感じます。しかし、市街地化が進み、次第に狭まっていくのが残念です。(2017年8月7日 木更津市)

参考文献 千葉県保護上重要な野生動物
～千葉県レッドデータブック～動物編 2011年改訂版 千葉県
(文・写真 千葉県立中央博物館ボランティア 成田篤彦)



写真①:舗装道に現れたバン (2016年5月3日 木更津市)



写真②:バンの親子 (2017年8月7日 木更津市)

MEMO バン ツル目クイナ科 体長32㌢

日本全国に分布。千葉県指定重要保護生物。湖沼、河川、水田などの湿地に生息。水草、水生昆虫、貝、甲殻類などを食べる。繁殖地はヨシ原や池、水田などの湿地。地面に枯草などを積み上げ皿形の巣をつくる。警戒心は強く、人影や物音などで草むらに隠れる。近年、ヨシ原の消失が著しく、繁殖数や越冬期の数も減少している。なお、冬季のバンのおでこは黄色。

しいむじなの由来



房総の山のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスダジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。

七・八月の観察会の締め(?)は大木研 究員と岡崎による発火実験でした。房総の川ではしばしば川底からプクプク泡が出ているのがみられます。これは地層に含まれるメタンガスです。それを集めて火をつけるとボン！地層にはいろんな恵みがありますね。

(岡崎浩子)

編集後記